令和５年 １月２７日	病害虫発生予報 ２月号	茨城県病害虫防除所

農薬危害防止と効果安定のために

土壌くん蒸剤の施用後は、しっかり被覆しましょう。

＜　目　次　＞

Ⅰ．今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：アザミウマ類、アブラムシ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

イチゴ：コナジラミ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

促成ピーマン：灰色かび病・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

【その他の病害虫】

イチゴ、促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

【防除所レポート】

令和４年の水稲における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況・・・・・・・・・・・ 4

サツマイモ基腐病の防除対策（貯蔵期、育苗期～植付期）・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅱ．今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」（https://pesticide.maff.go.jp/ ）で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所　　Tel ：0299-45-8200

ホームページでは病害虫・農薬関連情報がご覧いただけます。

https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/

Ⅰ．今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

１．アザミウマ類

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	やや多い～多い	県下全域

［予報の根拠］

① １月下旬現在、寄生花率（本年値 1.6%、過去６年平均値 0.03%）、発生地点率（本年値 40%、過去６年平均値 2%）ともに平年よりやや高い～高い。

［防除上注意すべき事項］

① アザミウマ類は増殖が速いので、花をよく観察し、発生の少ないうちに防除を徹底する。気温の上昇に伴い、密度が急激に増加するため注意する。
② 薬剤散布は、十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

２．アブラムシ類

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	やや多い	県下全域

［予報の根拠］

① １月下旬現在、寄生葉率（本年値 3.3%、平年値 1.6%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 40%、平年値 10%）は平年より高い。

［防除上注意すべき事項］

① アブラムシ類は増殖が速く、多発すると葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

（イチゴ　続き）

３．コナジラミ類

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	やや多い	県下全域

［予報の根拠］

① １月下旬現在、寄生葉率（本年値 0.9%、平年値 0.3%）、発生地点率（本年値 20%、平年値 13%）ともに平年よりやや高い。

［防除上注意すべき事項］

① 発生が多くなると、防除が困難となるほか、葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成ピーマン

１．灰色かび病

［予報内容］

発生時期	発　生　量	発生地域
－	多い	鹿行地域

［予報の根拠］

① １月下旬現在、発病株率（本年値 2.0%、平年値 0%）、発生地点率（本年値 50%、平年値 0%）ともに平年より高い。

［防除上注意すべき事項］

① 多湿条件で発生しやすいため、暖房、送風、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
② 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
④ 天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	1月下旬現在、平年並の発生である。
	ハダニ類		
促成ピーマン	うどんこ病	発生量：平年並	1月下旬現在、平年並の発生である。
	斑点病		
	アザミウマ類		
	黄化えそ病	発生量：多い	1月下旬現在、平年より多い発生である。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるアザミウマ類の防除を徹底する。
促成トマト	黄化葉巻病	発生量：やや多い	1月下旬現在、平年よりやや多い発生である。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
	灰色かび病	発生量：平年並	1月下旬現在、平年並の発生である。
促成キュウリ	退緑黄化病	発生量：平年並	1月下旬現在、平年並の発生である。一部圃場で発生が認められている。媒介虫であるタバココナジラミの防除対策等を徹底する。

防除所レポート

令和４年の水稲における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況

水稲巡回調査圃場での斑点米カメムシ類(以下、カメムシ類)のすくい取り調査および普及センターの水稲定点調査圃場の調査米（以下、定点調査米）の斑点米等発生調査の結果をもとに、令和４年の水稲におけるカメムシ類と斑点米の発生状況についてまとめましたので、次作の参考にしてください。

［調査方法および結果の概要］

１．カメムシ類の発生状況調査（すくい取り調査）

水稲巡回調査圃場57地点において、イネカメムシの虫数は、7月下旬は平年より多く、8月下旬は平年並の発生であった。地域別では、7月下旬には県南、県西地域で平年より多かった。クモヘリカメムシの虫数は、7月下旬には平年並、8月下旬には平年よりやや少ない発生であった。地域別では、7月下旬には県北、県南、県西で平年よりやや多く、8月下旬には県西で平年よりやや多く、その他の地域では平年よりやや少なかった。（令和4年9月30日発表　病害虫発生予報10月号p7-8防除所レポート参照）

２．斑点米等の発生状況調査

定点調査米計 37 点について、斑点米等の発生粒数を被害部位・種類別に調査した。

精玄米 1,000 粒当たりの斑点米等の発生粒数は、鹿行 1.9 粒、県央 1.7 粒と多く、県北 1.2 粒、県西 1.1 粒、県南 0.6 粒、全県平均では 1.2 粒であった。被害部位別では、基部が 54%と最も多く、側部 25%、頂部 19%であった。地域別にみると、県北では側部（39%）、県央では基部（48%）、鹿行では基部（48%）、県南では基部（63%）、県西では基部（69%）が多かった（表 1)。本年産の斑点米等発生粒数は、過去 11 年中 6 位で、平年並であった（図 1)。

表1　普及センター水稲定点調査圃場における斑点米等発生状況

地域［圃場数］	被害部位・種類における発生粒数（粒/精玄米1,000粒）[1]				
	側　部[2]	基　部	頂　部	ｶﾒﾑｼ黒点米[3]	合計
県北［ 4］	0.5 (39%)[4]	0.4 (30%)	0.4 (30%)	0　(0%)	1.2
県央［ 6］	0.4 (26%)	0.8 (48%)	0.4 (22%)	0.1 (4%)	1.7
鹿行［ 6］	0.6 (31%)	0.9 (48%)	0.4 (19%)	0.0 (2%)	1.9
県南［10］	0.2 (28%)	0.4 (63%)	0.1 (9%)	0　(0%)	0.6
県西［11］	0.1 (11%)	0.8 (69%)	0.2 (18%)	0.0 (1%)	1.1
全県［37］	0.3 (25%)	0.7 (54%)	0.2 (19%)	0.0 (2%)	1.2

1) 数値は四捨五入しており、部位・種類別の計と合計が一致しないことがある

2) 背部、腹部を含む

3) 頂部被害とくさび状の裂開がみられるもの

4) 括弧内の数値は部位・種類別の割合を示す

基部被害

［考察］

カメムシ類が米を加害する部位は、クモヘリカメムシが側部、イネカメムシが基部、アカスジカスミカメは頂部であることが多いとされている。これに従えば、県北ではクモヘリカメムシ、県央、鹿行、県南および県西ではイネカメムシが多かったと考えられる。

県全体では、基部被害が多く、イネカメムシの加害が多かったと考えられる。イネカメムシは、7 月下旬のすくい取り調査でも発生が平年より多く、県央、鹿行、県南および県西での優占種となっており、引き続きイネカメムシの発生に注意する必要があると考えられる。

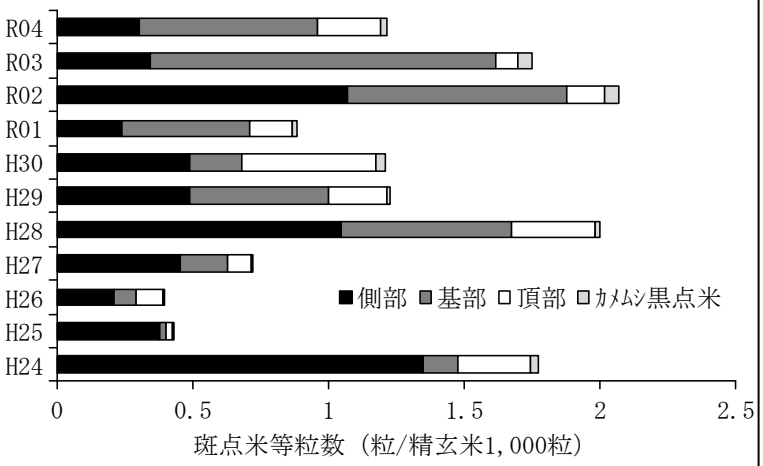

図１　普及センター水稲定点調査圃場における斑点米等発生状況の年次推移

サツマイモ基腐病の防除対策（貯蔵期、育苗期～植付期）

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中に地上部の茎葉が枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗していきます。また、周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。

育苗期から生育期、収穫期から貯蔵期まで、年間を通して発生するおそれがあるので、本病の侵入防止と早期発見に努めましょう。

［病気の特徴］

糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（畑に残った葉や茎、イモ）等が伝染源となる。貯蔵中のイモではなり首側からの変色や腐敗、苗床では葉巻や株の萎縮、葉の変色、苗基部の黒変等の症状が発生する。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、注意が必要である。

［防除対策］

【貯蔵期】

＜貯蔵中の対応＞

・貯蔵中のイモは、異常がないかどうか定期的に確認する。
・貯蔵中に疑わしい症状のイモを見つけた場合、そのイモを貯蔵しているコンテナを隔離する。

【育苗期～植付期】

＜育苗にあたっての注意＞

・苗の増殖は、ウイルスフリー苗を用いる。
・来歴が不明な種イモや切苗は絶対に使用しない。
・多発生地域からは、種イモや切苗を持ち込まない。
・生産者間で種イモや切苗の譲渡等は行わない。

＜作業にあたっての注意＞

・発生地域と行き来のあったコンテナ等は、洗浄、消毒してから使用し、残さや土を圃場に持ち込まない。
・作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土は良く落とし、水で良く洗浄する。

＜健全苗を確保するために＞

〔苗床・育苗準備時の対応〕

・種イモから苗を増殖する場合は、病害等が発生していない圃場で生産されたイモを選別して用いる。伏せ込む前の種イモは消毒を行う。

〔採苗時の対応〕

・採苗時のハサミはこまめに消毒を行う。苗は地際から５㎝以上の位置で切る。
・採苗した苗は、採苗後速やかに苗消毒を行う。
・苗消毒用の薬液は、使用当日に調製し、登録の内容に従って浸漬処理を行う。

〔購入苗への対応〕

・切苗を購入する時は、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

※本病が疑われる症状を見つけた場合は、速やかに各地域の農業改良普及センターまでご連絡ください。

Ⅱ．今月の気象予報

関東甲信地方１か月予報
（予報期間　1 月 28 日から 2 月 27 日）

気象庁（1 月 26 日 発表）

＜向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

［確率］

要素	予報対象地域	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	関東甲信全域	40	30	30
降水量	関東甲信全域	40	30	30
日照時間	関東甲信全域	30	30	40

［概要］
平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

＜1 週目の予報＞　1 月 28 日（土曜日）から 2 月 3 日（金曜日）
　　気温　関東甲信地方　平年並または低い確率ともに 40%
＜2 週目の予報＞　2 月 4 日（土曜日）から 2 月 10 日（金曜日）
　　気温　関東甲信地方　平年並の確率 50%
＜3 週目から 4 週目の予報＞ 2 月 11 日（土曜日）から 2 月 24 日（金曜日）
　　気温　関東甲信地方　平年並の確率 40%

農薬を使用する際は

1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
2 散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類（FRAC コード、IRAC コード）の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。